

【論文】

大学生ボランティアによる地域連携と人材育成

——地域と大学の役割——

柳澤智美*・牧野郁子**・鹿山朝香***

キーワード：ボランティア、地域連携、社会福祉協議会、単位認定、社会貢献

1. はじめに

本稿は、今後の大学でのボランティア活動をより活発にするために受入れ先の一つである社会福祉協議会と大学生ボランティアを受け入れた際の影響などを確認しつつ、大学生がボランティアに係わることの意義を考えたものである。

1.1 研究の概要

まず「大学側では、教育、研究とともに、第三の使命として地域貢献が重視される流れがあり（松宮, 2011；木村, 2014）、大学としてボランティアを教育カリキュラムに組み入れる動きが活発化していることが挙げられる。大学の地域連携とボランティアとのより一層の結びつきが求められる状況のなかで、大学生にとっては、地域でのボランティア活動が重要な学びの機会となることが期待されている。」¹と述べられているように、大学生ボランティアが地域で活躍することの意義や重要性を説明していく。

次に、学生や地域でのボランティアに係わる意識の変化、および近年、多くの大学がボランティアを単位として認定している様子をまとめた。多くの大学がボランティア活動に対して単位を認定している。そのためボランティアをどのように大学での科目として採用しているのか、その動向や内容の調査の必要性を改めて考えさせられた。

最後に、こうしたボランティアの取り組みを通して本学部の紹介と社会福祉協議会が大学生を受け入れ、活動することでどのような影響を受けているかなどを記載し、今後の検討課題としている。

1.2 研究の目的

本稿では、大学生を対象としたボランティア活動を通して、地域におけるボランティアのニーズと学生のボランティア参加の重要性を謳い、その課題を検討していくことを目的としている。

* 城西大学現代政策学部教授

** 社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会

*** 社会福祉法人日高市社会福祉協議会

1 松宮朝, 石井晴雄, 川原千香子, 小島祥美, 中根多恵, 笹山実希「大学連携におけるボランティア活動推進をめぐる課題－長久手市4大学学生ボランティア調査から」愛知県立大学多文化共生研究所 共生の文化研究 12, 26-47 (2018-03-31), p26. L12-L16

ボランティアが地域貢献に有益であるならば必修化することはどうかという議論も生まれる。だが、これには大きな問題も含む。「大学生を含む若い世代の継続的なボランティア活動やボランティアに対する意識が定着したとは言えず（荒井・野嶋, 2017：98）、また学生のニーズや、地域のニーズを無視した制度化は、『強制されるボランティア』につながる問題（津止・斎藤・桜井, 2009：62）がつきまとう。したがって、いかに、大学生のニーズと地域の課題をつなげ、大学生にとっての教育的意義を持つ取り組みが可能かを検討することが重要な課題となる。」² という議論の通り、多くの大学が地域と大学連携を謳っているが、大学生ボランティアの活動を積極的に捉えている反面、参加学生に強制する形になると学生の活動にヤル気の温度差が、出てしまう。そのため、後述するが強制参加ではない形で、参加を促すことが望ましい。そのためさらなる改善点や、活動推進のための課題を抽出していきたい。

2. 学生とボランティア

2.1 ボランティア参加のメリット

大学生がボランティアに参加する際に事前に話すことは、「地域の課題を理解し、解決策を提案できるようになること」である。実際にボランティアに参加すると、地域の課題を考える機会を得て、住民や市民の皆さんと一緒に活動することになる。もしくは自治体職員と直接会話をするこも出て来るため現実の課題を直接見ることが多い。そのため、ボランティア活動に多く参加することで、現場で起きている問題を直視し自らどのように対処するべきなのかという問題と直接かかわる機会が多くなる。もちろん初めから提案できる学生はほほいないが、数回参加しているうちに他団体と比較したり他自治体の活動と比較したりしつつ自分なりの答えを得ていく。これは、ボランティア関連書籍を何冊読んでも、得られる感覚ではなく、現場で起きる問題をどのように解決していくかということに直接かかわったことがある学生のみにある重みといえる。そのため、ボランティアに行く学生への支援として必要なことは何かを考えたい。

ボランティア活動は地域にとっても学生にとっても相互に効果がある。ボランティア参加学生から、参加後に得られたことは何かと聞くと、「大学や部活動では得られない直接だれかの役に立っている」と思える感覚、または「ありがとう」と言われることでの「自己肯定感があった」と言われる。次に、「今までにない、幅広い世代の人との交流」によって「視野が広がった」「新しい価値観を得られた」などの新しく得た何かであった。「近年、地域共生社会の構築に向け、ボランティア・市民活動への参加がさらに求められるようになっている。」³ と述べられるように、多くのボランティア活動や支援が望まれている。だが、同論文に「ところが現状として、ボランティア人材の高齢化による担い手の不足、ボランティア活動への参加希望数と実際の参加経験数とのギャップ、政治・経済・社会

2 松宮朝, 石井晴雄, 川原千香子, 小島祥美, 中根多恵, 笹山実希「大学連携におけるボランティア活動推進をめぐる課題－長久手市4大学学生ボランティア調査から」愛知県立大学多文化共生研究所 共生の文化研究 12, 26－47（2018－03－31）, p26. L20－L25

3 遅力裕「ボランティア参加における動機づけの内面化：自己決定理論に基づいた考察」同志社大学社会学会 評論・社会科学 (149), 27－40（2024－05－31）, P27, L1－L2

への若者の不参加または無関心などの課題があり、ボランティア活動の終焉（仁平2011）、ボランティア・市民活動の危機（村上2015）が懸念されている。⁴とも述べられておりボランティアの需要に対してボランティア参加の供給が追いついていない。経済学で述べられている需要と供給は、価格によって、一定の方向に進み、どこかの地点で均衡点が見つかる。だが、ボランティアに関していえば均衡点が見つかることは難しい。均衡点での特徴は「資源が必要なところに必要なだけ配分されるため、不足や無駄が生じない」ことであり、この資源を人的資源として置き換えることを定義し、次に「消費者は望む商品やサービスを適正な価格で購入」することになるが、ボランティアにはサービスを適正な価格で購入するという概念を当てはめるためには、ボランティアがいない場合の人的にかかった費用、またはボランティアがいた場合に本来かかるべき費用は、どのように活用され地域経済に影響があったかなどを考えていくこととなる。では「ボランティアの市場価格」をどのように表現するのか。現在ボランティア活動の経済的価値は大きく「ボランティアの経済的価値の把握に対する関心が高まっている。」⁵が、ボランティアを価格に置き換え、その価値を求めていくことは今後の検討課題といえる。

また、ボランティアに参加する学生は、そもそも金銭的価値を求めていることが少ない。仮に、金銭的価値を求めている学生がボランティアに参加することになると、「ただ働きさせられた」「これ、いくらもらえるのですか」などの苦情が出てくる。そのような学生は最後までボランティア活動に参加することはなく、その場を離れてゲームなど始めたりなどの拒否反応を示す。これは、強制してボランティアをさせられたと考えることにつながり、次回ボランティアに参加することはまずない。ボランティアに参加している学生の多くは「何かをしたい」「何かできるかもしれない」「良いことがしたい」など、漠然とした「何か」を求めて参加していることが多く、その活動の中で何かを見つけることを求めている。その「何か」を確立させることが、ボランティア参加の成功の有無を決める。つまりは「動機づけ」である。この動機づけが今後のボランティアへ参加したいと思う意思決定へとつながる。学生にとって参加して良かったと思える活動は「動機づけ」にコミットした内容のボランティアと出会えた時といえよう。例えば、「塾に行くことができない子供の学習をサポートできている」ということを動機づけるためには「塾に行きたくても経済的に困難である」「近くに塾がない」「塾に行っても講義についていくことができない」などなんらかの困難を持った子供がいた場合、その子を「助けたい、何かサポートできることをしたい」ということが動機になる。この動機づけにコミットするようなボランティアの受け入れ先や、場所が必要となる。ゆえに活動内容を話し合うことが出来る地域住民や市民活動、そして自治体や社会福祉協議会からのボランティアの依頼は非常に重要となる。

2.2 ボランティア参加のデメリット

学生が、ボランティアに参加する際に、注意しなくてはいけないことがいくつかある。それは、昨

4 遅力裕「ボランティア参加における動機づけの内面化：自己決定理論に基づいた考察」同志社大学社会学会 評論・社会科学 (149), 27-40 (2024-05-31), P27, L3-L5

5 渡辺裕子「ボランティア活動の経済的価値のマクロ的分析：『社会生活基本調査』を用いて」駿河台経済論集 27 (1), 25-50 (2017-09), p25, L1-L3

今の大学生は引く手あまたであるということであろう。ボランティアでも必要とされているが、アルバイトでも必要とされていることが多く、アルバイト先で休まないで欲しいと頼まれているケースも多く見る。実際ボランティア履修学生がボランティアをキャンセルする理由は体調不良よりもバイトが休めなかった、急遽誰もいなくて来て欲しいと言われたなどが非常に多い。つまりボランティアによる「時間的拘束」や「金銭的負担」を考慮しなければ学生がボランティアを続けることが難しくなる。

まず、時間的拘束については、ボランティアに参加したいと言った学生に対して時間的なことや場所などを最初によく話し合っておく必要がある。参加したい気持ちはあっても、ボランティアかバイトを選択しなくてはいけない状態となりボランティアの参加ができないケースが多くなる。そのため、開始前に時間、場所、時期などよく話し合うこととなる。これは部活やサークルに入っている学生も同様で、特に運動系の部活やサークルでは練習時間を割いてまでボランティア参加に行くことは難しい。そのため、気持ちは尊重しつつ、休める範囲で対応可能なボランティアを探していく。また、ボランティア先が遠い場合などは、交通費などの支給が可能かどうかなども事前に受入れ先に相談しておく必要がある。ボランティア参加時間に金銭支給がないとしてもボランティア先までの移動にかかる交通費などの負担は軽減させておく必要がある。これは金銭的な価値というよりも、受け入れ先から大切に思われている、必要とされているという自己肯定感につなげるためである。

また、受け入れ先と依頼先としての関係としては、「事故や過剰労働」になっていないか「体調不良による突然の欠席」がないかなど互いに連絡を取り合える関係性が必要である。これらの連絡が取り合えていない場合、互いの信頼関係を壊してしまうリスクがある。互いの信頼関係は時間をかけて構築していくものであるが、互いの感情の違いや価値観の相違や目的としていることの認識の差によって一度崩れてしまうと二度と戻ることはない。その後も取り繕うことはできるが、心底信じあうことが難しくなってしまう。1つ1つの出来事や対応に注意が必要といえる。事前によく話し合い、受け入れ先との信頼関係は、非常に重要といえる。また、個人で自由に行くボランティアとは違い、大学を通していくボランティアの場合、参加する学生にも注意を払う必要があるが、何よりも学生を送り出す際の対応は注意が必要である。学生がミスした場合、学生の責任であり、こちらは知らないではすまない。「活動のルール」を守ることや何かあった際の報告や連絡や相談などをしっかりとすることを学生側にはよく話しつつ、受け入れ先との信頼関係構築に努めることを伝え、このボランティアの先にあるものや、学生が「動機」と思えるような何かを与えてくれるように受け入れ先との信頼関係を構築していく必要があることをしっかりと伝えていかなければならない。

2.3 学部で単位認定をする意味と効果

現代政策学部の学生で、希望者はボランティア活動を単位として認めている。ただし、自由にボランティアをしてきたことを単位として認めるということではない。基本的には学部で推奨している先（主に大学周辺の坂戸、鶴ヶ島、日高、川越、毛呂山町、鳩山町、東松山市）の市町村からのボランティアの依頼や、自治体に関係するボランティア先、または連絡をよく取りあうことができる団体や組織である。現代政策学部のボランティアは「良いことをしよう」というボランティア精神などの精神論で活動しているのではなく、インターンシップと並ぶキャリア教育の一環としての活動である。

ボランティア活動を単位として認定することで、3つの効果が期待できる。

(1) キャリア形成

ボランティア活動を通じて、インターンシップでは学ぶことができない組織と地域住民や市民との関係を知ることができる。人間関係の構築や自らがどのような立場で組織に存在することができるのかなど、自分自身の活動や行動を改めて見つめ直す機会となる。そのため、将来のキャリアにつながる得意分野が検討できる。

(2) 地域貢献と課題発見

地域社会や社会全体への貢献を体験しつつ、実践的な学びを得ることが可能となる。地域の課題を発見し自らが解決することを試みるのが可能となる。私たちは、ネットや書籍で多くの知識を得ることができる。だが、地域のイベント当日に起きている問題などを直接見ることによって、自治体側と住民や市民側の思いの違いが出た場面でどのように対応しているのか、自分であればどうするのかなどを考える場を持てる。多くの活動の場合、感情で判断できない部分も出てくる。このようなときどのように判断するのであろうか。例えば被災地で毛布が10枚しかないが必要としている人は12人いる。この場合、毛布は渡すのか、渡さないのか、仮に渡すなら誰に渡すのかなど、ボランティアに参加することで現場でしか学べない考え方を学ぶことができる。

(3) 実践的な学びと得意分野の発見

教室や講義ではわからない、現場での経験を通じてでしかわからない実践力や柔軟性や適応能力を発見することができる。真面目で良い学生が社会では頑固で融通が利かないと言われることもままある。おっとりしていて、自分の意見を普段言わない学生が現場ではハキハキと自分の判断で活動し受入れ団体から、来年も来て欲しいと切に希望される場合もある。学力や教室だけでは判断できない長所を何度も発見することがあった。自分に何ができるか、どのような動きや行動が得意かなど、いくつもあるボランティア先で何度も体験し確認することができる。得意分野や得意な年齢層がわかるのはボランティアの利点であろう。

このように3つの効果を期待できる。また、ボランティアを単位認定する最大の利点は、相談やケアをすることが可能であることであろう。ボランティアは自発的なものであり、嫌だったらやめてもいいはずである。嫌ならいかなければいいのである。だが、単なるボランティアに参加しているのではなくキャリア教育の一つとして履修しているために行かなければ単位にならない。途中で帰ってしまったら講義を途中で出たことと同じになる。ボランティアだからといって嫌だからやめることや、無責任な行動をとることなく責任ある行動を学生に意識してもらうことができる。さらに、嫌だから行きたくないなどの問題が発生した時は、ボランティア担当者と相談して一緒に解決を考えることができる。何故嫌か、何が嫌だったか、どうしたら続けることができるか、どのようなところなら活動できそうかなど、本人の参加意欲がある限りサポートをすることが可能であることは、とても大きい利点である。1つのことをやり抜く力や最後まで続けていくことも重要であるが、何故続けることが難しいかなど理解しつつ、どう乗り越えるかを一緒に考えることができるため、学生が望むならば一歩前進して考えることができる。中には一回も参加せずに参加を辞退するというケースも存在するが、ボランティアに数回参加していたにも関わらず途中で嫌になって投げ出したというケースは2015年からボランティアを開始して2件のみであった。

3. ボランティアに関する意識調査と取組

3.1 ボランティアと学生

日本財団ボランティアセンターが実施した「全国学生1万人アンケート～ボランティアに関する意識調査2023～」⁶がある。全国1万人アンケートでは「目的：若い世代のボランティア活動に対する意識調査を行い、ボランティア活動への関心、活動したことのある分野などを調査し、今後のボランティア支援の参考とする。」⁷とあり調査対象は18歳から26歳であった。その中にボランティアに関する興味の有無の検証があるが、2017年も2023年も、興味のある学生は60%強でほぼかわらない。興味を持っている年齢は18歳から19歳が一番多く、その後緩やかに低下していく。実際にボランティアに参加した結果を見ると2017年よりも2023年の方が若干だが減少しているという結果になっていた。だが、参加してみたいと考える希望者は実際には参加していない学生の中にも多くいることから、機会やきっかけがあれば参加する兆しが見てとれる。ボランティアに参加した活動の1位から3位は1位：子供を対象とした活動、2位：スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動、3位：まちづくりのための活動との記載があった。

このアンケート結果を見て現在、学部で活動している学生のボランティアの状況と非常に似ていることが判明した。現代政策学部の学生も「こどもを対象とした活動」に参加したいと言う学生が多く、実際に参加率も高い。また、こども関係のボランティアはボランティア終了後も学生の笑顔が多く、考えていることを言葉で表現してくれる。また、公務員希望者が多いため「まちづくりのための活動」などに関した希望者が多いところが日本財団ボランティアセンターの実施した結果と多少異なるが、「スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動」にも興味は高く、美術館や学会ボランティアなどにも、多くの学生が集まっている。学部の学生がボランティアに参加する際、必修科目ではないので自発的にボランティアに参加したいと言う学生のみが参加する。この必修ではないが履修し単位を認定しているところが、ボランティアに興味はあるがまだ参加したことがない学生への後押しや動機づけにつながっているようである。もちろん単位の認定などしなくても自ら積極的にボランティアに行く学生も存在している。だが、アンケートの中にもあるように興味はあるが、実際には、一度も参加したことがない学生が多い。その参加したことが無い学生への動機づけになるといえよう。ボランティアを必修化してしまうと「外発的動機づけの負の影響について、過剰正当化効果（Overjustification effect）が指摘されている（Stukas, Snyder, Clary 1999）。ボランティア活動を必修科目として履修する場合、外部の圧力を感じている学生ほど、将来再びボランティア活動に参加する可能性が低かったと結論づけられている。ボランティア活動は常に報酬や罰などの外部の規制なしで行われるべきであることを明らかにしている。」⁸とあるように、強制されたと感じてしまうことはマイナスであろう。非常に多くの需要があるとしてもボランティアの必修化は望ましい結果にならないことも多く、

6 出所 <https://www.volacen.jp/pdf/2023-student-volunteers-survey.pdf>（2025年1月）

7 出所 <https://www.volacen.jp/pdf/2023-student-volunteers-survey.pdf>（2025年1月）

8 遅力裕「ボランティア参加における動機づけの内面化：自己決定理論に基づいた考察」同志社大学社会学会 評論・社会科学（149）, 27-40（2024-05-31）, P35, L26-L29

履修には、やはり自らの意思決定を必要とする。「2005年、中央教育審議会答申を受け、その後、学校教育基本法の改正により、社会貢献が大学の役割として明文化された。」⁹とあり、「社会参加意識を高めるために、大学において若者がボランティア活動に参加する機会を創出することは有効と考える。」¹⁰など、大学においても学生がボランティアに参加しやすい仕組みづくりを検討していく必要があると思われる。

3.2 ボランティアと市民

内閣府から2023年9月に「2022年度（令和4年度）市民の社会貢献に関する実態調査報告書」¹¹が出された。調査の目的として「本調査は、市民の寄附・ボランティア活動の実態を明らかにし、共助社会づくり及び社会貢献に関する施策のための基礎資料を得ることを目的として実施する。」¹²とされ、さまざまな調査結果が出ている。職業や年収なども踏まえ市民の多くがいまだボランティア活動に参加していないことが明らかになった。2018年と2021年の比較がなされているが、どちらも80%強が不参加である。学生と違い、市民の場合は「まちづくり・まちおこし」の参加者が多い。参加動機は「社会の役に立ちたいと思ったから」が多く、自己実現や自分の生活の「場」とは違う「場」をついているケースも多い。また、参加の妨げになっている要因は「参加する時間がない」が多く、次いで「ボランティア活動に関する十分な情報がない」となる。学生の場合も十分な情報がないことや知り合いがいなかったことが参加の障壁になっていたようである。それゆえ、同級生と行けるボランティアや受入れ先の情報をボランティアの担当者が良く知っており参加前に説明することで学生にとってボランティア参加の障壁が少なくなっている。

このようなことから、ボランティアに参加する市民に対して受入れ側は積極的な情報提供が必要といえる。人々のつながりや信頼関係を与えつつ、共同体の中でのどのような関係性を持っているかなどを伝える努力が必要となる。今後、ボランティアは相互関係のネットワークから生まれる資源や価値を共有する形へと変化を遂げていく。ボランティア活動は福祉に関連付ける傾向が強いが、今後は経済学や社会学などの社会の発展や個人の幸福感や社会現象、そして経済活動における効率性に影響を与える新しい要素といえる。このような流れはソーシャル・キャピタルという人間関係の中から生まれる社会関係資本として人と人をつなぐネットワークや信頼関係、一定の規範に基づくものである。ソーシャル・キャピタルは、共助社会において重要な役割を果たすと思われる。「このソーシャル・キャピタルには、今日、様々な分野の研究者や政府関係機関が注目しているが、その理由は、ソーシャル・キャピタルが「フリーライダー」「囚人のジレンマ」「コモンズの悲劇」のように他人と協調するしくみが欠如することで社会状況が悪化することを防ぎ、またその蓄積が地域の治安、健康の増進、教育の成果、経済開発、民主主義の機能化など様々な面で、住民の生活環境を向上させると期待され

9 佐藤陽「大学ボランティアセンターにおける地域ボランティア活動の推進」十文字学園女子大学紀要 52, 43-55 (2022-03-28), p46, L26-L27

10 佐藤陽「大学ボランティアセンターにおける地域ボランティア活動の推進」十文字学園女子大学紀要 52, 43-55 (2022-03-28), p46, L27-L28

11 出所 https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/R4_shimin_report.pdf (2025年1月)

12 出所 https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/R4_shimin_report.pdf (2025年1月)

ているためである。』¹³ ように、今後、地域コミュニティの衰退を防ぎ、信頼感の構築された社会に必要とされるであろう。ソーシャル・キャピタルの運営が活発な地域であれば、ボランティア活動への参加率が高くなり信頼とつながりが参加の障壁を下げ、自然な形で協力が生まれる。また、地域経済の活性化の底支えとなる、人的ネットワークが安定し、ボランティア活動が持続しやすくなり、協力が円滑になり、問題解決能力が向上するなどの効果が期待できる。現在、多くの町内会の運営が厳しい状態といえる。そのため、新しい形で支え合う方法が生まれている。例えば、鶴ヶ島市の支え合い協議会¹⁴ など市全体を網羅しており、地域活動も盛んである。コロナ禍の中でも地域の活性化を目指して安全対策をしつつ「朝市」などを開催し、学生ボランティアの受け入れも人数に制限をつけつつも行ってくれた。ボランティアの受け入れ先ということであれば、活動内容もさることながら、やはり最後は人といえる。どんなことにも負けない強い意思や、地域を活性化させたいという強い思いなど、特産品や工芸品なども地域活性化には必要かもしれないが、やはり最後は人である。学生には、出来ないことの言い訳をする大人ではなく、出来ることを精一杯活動している大人を見せたい。

3.3 ボランティアと大学

大学におけるボランティア活動の導入は1995年1月の阪神淡路大震災によるところが大きい。この年はNPO元年、またはボランティア元年という人もいる。どちらにしても他者が他者のために何か動きたいと思いを強くした年といえる。この時の、ボランティアの原動力は思いの強さであろう。阪神淡路の現状を知り何か自分にできることをしたいという多くの人が集まった。学部学生のボランティアも同じで、学生に何故ボランティアをしたいと聞くと、「何かしたい」など人の役にたちたいという思いを話している。ボランティアは自発的な行動であるということで、単位認定にすることに関して否定的な意見も多く存在したが、開始から10年たった今、否定的な意見はなくなってきたように思われる。それは、学生たちが継続してボランティア活動に参加して、その活動内容を深め、学ぶ機会の提供を理解していった結果ともいえる。学生の活動を応援する教員や、サポートを徹底する職員の支援もあり、学部として、そうした学生の声を生かし、「ボランティア」を単位認定科目としてコロナ禍も挟んだ10年の間に一度も休むことなく開講できたことには多くの関係者に感謝している。学部のボランティアはコロナ禍の2020年においても5人ではあったが、こんな時期だからこそ自分にできることをしたいと言って参加してくれた学生がいた。内容に関しては、青空の下で里山のサポートのような体力の必要なものが多くなってしまったが、それでも学生は履修したいと来てくれた。その年は5人しかいなかったこともあって、普段のボランティアよりもオンラインなどを利用しつつ話し合う時間も長く持つことができ、活動内容もよくよく話し合いながら進めることができた。

学部のボランティアを履修する場合、1年次から履修できることや時間など、相談していくことで比較的履修はしやすい。だが、問題となるのは単位認定となるため講義科目と同じ時間だけボランティアに参加しなくてはならない。おおよそ40時間である。これは、講義を受け、バイトをして、部活やサークルをしている学生にとっては少々厳しいものかもしれない。また、担当者が常に同じである

13 金谷信子「市民社会とソーシャル・キャピタル」コミュニティ政策学会 コミュニティ政策 6 (0), 124-143 (2008), P125, L1-L6

14 出所 <https://www.city.tsurugashima.lg.jp/page/page000707.html> (2025年1月)

ことは利点もあるが欠点にもなる。地域のボランティアの受け入れ先と密接に関わりつつ学生とも話していくのでマッチングとしての機能は高いといえる。だが、ボランティアの中で、ボランティア活動への参加による様々な人と関わりを持つことと話しているのにも関わらず大学担当者は常に同じであるという問題点もある。組織として運営するのではなく、どうしても属人的になってしまう。

では、他大学でのボランティア活動はどうであろうか。いくつか活動を確認していきたい。

1 明治大学¹⁵

＊ 明治大学が、学生のボランティア活動を全学的に支援すること

＊ 支援を通して学生の社会性や自主性が涵養され、社会に有用な人材が育成されること

センターは、ボランティアセンター運営委員会と、その下に組織された ボランティア活動支援分科会（駿河台、和泉、生田、中野）とで成り立ち、主としてキャンパス単位で運営を行い、それぞれ特色ある取り組みを展開しています。

各キャンパスには窓口スペースが設けられ、専任のスタッフが配置されています。

とあり、ボランティアに関する講座・イベントを行っており学生の主体的な活動を支援している。また、政治経済学部において社会実習ボランティア活動単位認定制度とある。¹⁶ 合計時間が80時間以上で2単位となる。明治大学ではボランティアセンターを通して学生のボランティア活動を支えつつ学部単位での単位の認定を行っている。

2 立教大学¹⁷

ボランティアセンターは2003年に設立されました。センターの誕生以前から、立教大学には長く実り豊かなボランティア活動の歴史と伝統があります。「道を伝えて己を伝えず」と評される創立者ウィリアムズ主教の生き方は、「仕えられるためにではなく仕えるために」生きるキリスト者の模範として立教のボランティア精神の原点を示しています。また、アメリカ聖公会の宣教師であり、本学の教授でもあったポール・ラッシュ博士の清里における自然・農村・青年教育を結びつけた働きはボランティアという言葉がまだ使われる以前に、真のボランティア精神を育成するための働きでありました。

とあり、立教大学もボランティアセンターが存在している。さらには学生個々の支援や、体験機会の提供、ボランティアサークルの支援や学内の協働を推進し立教大学周辺地域の課題と向き合っている。また、全学共通科目・全学共通カリキュラムとしてボランティア論が2023年度¹⁸、2024年度¹⁹に半期開講されている。

15 出所 <https://www.meiji.ac.jp/campus/volunteer/6t5h7p00000gfgym.html> (2025年1月)

16 出所 <https://www.meiji.ac.jp/seikei/project/volunteer/volunteer.html> (2025年1月)

17 出所 https://www.rikkyo.ac.jp/campuslife/support/extracurricular_activities/volunteer.html (2025年1月)

18 出所 https://sy.rikkyo.ac.jp/web/preview.php?nendo=2023&kodo_2=FA185 (2025年1月)

19 出所 https://sy.rikkyo.ac.jp/web/preview.php?nendo=2024&kodo_2=IB394 (2025年1月)

さらに立教大学の「立教サービ斯拉ーニング（Rikkyo Service Learning : RSL）」は、全学部学生を対象に「世界・社会・隣人」と実際に交わりながら、社会の現場も「教室」として捉える、新しい「学修」スタイルの科目群です。]²⁰を取り入れ、より社会課題と向き合う講義系科目と実践系科目の2種類を取り入れている。また事前学習後に体験学習を行い、事後学習をする。「身近な組織、地域やコミュニティ等に向かって働きかけ、行動する力を養うことを重視。」²¹しておりボランティアの先にある問題解決を見据えつつ、ボランティアセンターとともにキャンパス外での学びを支えている。

3 フェリス女子学院大学²²

学生が参加するボランティア活動は、子ども（小学校での学習支援等）、障がい者（障がい者施設での活動等）、海外をルーツとする方々（日本語学習支援、国際文化交流等）等に対する取り組み、国際協力（難民支援、フェアトレード等）、演奏ボランティア（音楽の魅力を普及する取り組み等）と多岐に渡っています。また、外部機関・団体と連携をし、国際機関等でのインターンシップ、海外でのワークキャンプ等も取り組んでおり、ボランティアの活動時間や内容によって、単位が認定されます。

フェリス女子学院大学も単位として認定しており、以下のように述べている。

「いわゆる『単発ボランティア』は、ボランティア活動体験として、きっかけになる意義のあるものです。しかし、単位認定対象となるのは、学生が自分自身の関心や問題意識を見つめ、じっくりと時間をかけて取り組む活動です。

このため、ボランティア活動先の相談、計画書の提出から、活動終了までの具体的な相談に応じ、助言する役割を、ボランティアコーディネーターが担っています。ボランティア活動の内容を、学生が主体的に選び、必要な事前準備をし、具体的なニーズのある現場や人々との出会いの中で学び、ふりかえることで、『気づき』を自分の経験として深め、社会の中で『他者と共に』生きる市民となる、そのためのサポートです。』²³

フェリス女子学院大学は、「厚生労働省の大学における福祉ボランティアによる単位取得」の事例²⁴としてあげられている。また、文部科学省においても、「令和6年能登半島地震に伴う学生等のボランティア活動について（通知）」²⁵という形で令和6年能登半島地震に伴い、「ボランティア活動を希望する学生等への修学上の配慮やボランティア活動における安全管理の徹底等」ということを大学に修学上の配慮などを通知している。厚生労働省によれば「ボランティア活動は個人の自発的な意思に

20 出所 <https://spirit.rikkyo.ac.jp/rsl/SitePages/index.aspx>（2025年1月）

21 出所 <https://spirit.rikkyo.ac.jp/rsl/about/SitePages/index.aspx>（2025年1月）

22 出所 <https://www.ferris.ac.jp/life/volunteer-center/courses/>（2025年1月）

23 出所 <https://www.ferris.ac.jp/life/volunteer-center/courses/>（2025年1月）

24 出所 <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000rkqz-img/2r9852000000rkxs.pdf>（2025年1月）

25 出所 https://www.mext.go.jp/content/20240122-ope_dev03-000033400-3.pdf（2025年1月）

基づく自主的な活動であり、活動者個人の自己実現への欲求や社会参加意欲が充足されるだけでなく、社会においてはその活動の広がりによって、社会貢献、福祉活動等への関心が高まり、様々な構成員がともに支え合い、交流する地域社会づくりが進むなど、大きな意義を持っています。』²⁶ との記載にもあるように個人の自発的意思に基づくものがボランティアではあるが、その活動の広がりから地域社会づくりに必要な要素となっている。また、厚生労働省によれば「国民のボランティア活動への理解を深め、参加を促進するための拠点としてのボランティアセンターが、社会福祉協議会などに設置されています。』²⁷ とあり、ボランティア活動における社会福祉協議会の役割は大きいといえる。

4 学生による社会連携活動

4.1 今年度の現代政策学部ボランティア

現代政策学部では、2015年度より「ボランティアを単位認定」とした。必修ではないものの「学生によるボランティア活動」の制度化によって、「自治体や地域団体から依頼のあるボランティア活動」に意欲ある学生が参加している。それらの活動に学生が参画することで、本学部は、地域貢献へと取り組んでおり、近年では徐々に支持を得始めていると思われる。なによりも自らの意思でボランティアに参加し、学生が地域社会において直接活動することで、課題を発見し問題を解決しようとする自己の成長を促すことができる。1年生から4年生まで履修できるので毎年参加している学生も多い。単年度で終わってしまう学生もいるが数年履修する学生は地域の「顔」として活躍する学生もいる。〇〇君に今年も是非来て欲しいと直接連絡が来ることもあり、そのような場合はすでに学生も「今年も参加するつもりでした」と意欲を見せていることが多い。

今後は、より学生の希望と地域の需要の調整をすることを中心とし、何故このボランティアをする必要があるのか、どのような思いで地域からボランティアに来て欲しいと依頼されているのかということをしかりと伝え、参加する前に考え参加できるようにサポートしていきたい。

26 出所 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html (2025年1月)

27 出所 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html (2025年1月)

写真4.1 学生によるボランティア活動



表4.1 2024年度の「学生によるボランティア」の取り組み紹介

NO	日時	参加名および内容
1	5月24日－26日	学会のボランティア
2	6月7日	Happy-lucky-café
3	6月21日	Happy-lucky-café
4	6月	子ども食堂
5	6月22日－23日	昭和レトロ祭り
6	7月13日	上広谷第一自治会夏祭り
7	7月20日	鶴ヶ島サマーカーニバル
8	7月20日	脚折朝市
9	7月27日	小川町七夕まつり
10	7月27日	子ども食堂夏祭り
11	8月4日	脚折雨乞
12	8月5日－18日	日高社会実験の運営業務
13	8月	子ども食堂
14	8月15日	Happy-lucky-café
15	8月17日	脚折朝市
16	8月23日－25日	南町連合夏祭り

NO	日時	参加名および内容
17	8月10日－12日	竹灯の夕べ
18	9月13日	Happy-lucky-café
19	9月21日	脚折朝市
20	9月27日	日高フードパントリー
21	10月5日	坂戸体育祭
22	10月19日	サザンウォークラリー大会
23	10月19日	鶴ヶ島市西市民センター祭り
24	10月20日	坂戸文化祭
25	10月25日－26日	第29回虹の大橋まつり
26	10月26日	日高実証実験の反省会
27	10月26日	さかどマルシェ
28	10月28日	インタビュー調査
29	11月2日－4日	東松山3day マーチ
30	11月3日	坂戸市文化祭
31	11月9日－10日	鶴ヶ島 産業まつり
32	11月9日	福祉出合いの広場
33	11月9日	東京サントリーホール受付
34	11月11日－14日	美術館展示準備
35	11月13日	市イベントスタッフ
36	11月15日、21日	美術館展示準備
37	11月23日	日高 武蔵台
38	11月23日	子どもサロン
39	11月26日	展示会表彰式
40	11月28日	障害を持つ方とお話会
41	11月29日	Happy-lucky-café
42	12月16日	美術館撤収
43	12月18日	美術館撤収
44	12月20日	Happy-lucky-café
45	1月19日	新春拡大マルシェ

4.2 社協から見た大学生ボランティアの現状

先にも述べたように、社会福祉協議会におけるボランティア活動の役割は、地域社会全体の福祉を向上させるために大きく貢献し役割は大きい。社協は、ボランティア活動の促進を通じて、住民が互いに支え合い、共助の精神を育む場を提供しつつ、地域の課題に対する解決策を地域住民と共に考え、ボランティア活動を通じて具体的な支援を行っている。また、その中で学生ボランティアの引き受けなども積極的に行っており協働して様々な取組に挑戦している。

例えば、ボランティア活動を介して、地域住民が地域課題に主体的に取り組むきっかけを市民と共に考え、様々な活動やイベントを開催している。高齢者の見守り活動や地域の清掃活動や、高齢者へのLineの使い方講座（コロナ禍ではオンラインでも開催）などのような取り組みがあり、今後に必要なことを常に取り組んでいる。そのため、ボランティア活動を通じて、住民間のネットワークや信頼が構築されソーシャル・キャピタルの強化につながっている。そのこともあって、社協の開催したボランティアは目的が非常にわかりやすく学生の個人の成長と社会貢献につながる。参加することで

新たなスキルや視点を獲得する機会となり、社会の一員としての役割や貢献を体感することができる。また、社協のボランティアは自治体が行うボランティアよりも、より住民が互いに支え合う「共助」を意識するボランティアが多く、人と人の関係性が深いともいえる。公助（行政支援）と自助（個人努力）の間にある共助を実現することで、持続可能な地域社会を構築することを可能にしている。これは、行政が提案しているボランティアや地域イベントとは違うニーズをとらえており柔軟な手段として機能している。住民の多様なニーズに応じた支援を可能とし、地域全体の生活の質を向上させる。社協におけるボランティア活動は、個人・地域・社会全体にとって非常に重要な意義を持っている。これらの活動を通じて、住民が自ら地域の福祉に関与し、支え合う仕組みが強化されていく。

活動の事例1 日高市社会福祉協議会

- 1 ボランティア名 パントリーボランティア
- 2 開催日時 令和6年9月27日（金）9：30～12：00、13：30～18：30
- 3 内容 食品の運び出し、陳列、袋詰め等
- 4 場所 埼玉県日高市楡木201番地 総合福祉センター「高麗の郷」
- 5 大学生が（その対象ボランティア）参加したことによる変化や良い点や悪い点などの気が付きなどを含めまして日高市社会福祉協議会が主催するパントリーで、地域の方やボランティア、企業が寄付していただいた食品の運び出し、陳列、袋詰め等の活動を手伝っていただきました。始まる前に、ボランティアやスタッフと顔合わせし、パントリーの目的など説明をさせていただきました。

なかには重い荷物の運び出しや、陳列や袋詰めも率先して動いてくださり、学生のフットワークのよさに、社協としてもとても助かりました。たくさんの学生が参加することで、このような支援があることも知ってもらえたことも良かったです。

活動の事例2 鶴ヶ島市社会福祉協議会

- 1 ボランティア名 里山体験会
- 2 開催日時 2024年6月9日
- 3 内容 つるがしま里山サポートクラブの主催する里山体験会のボランティア
- 4 場所 鶴ヶ島市高倉市民の森
- 5 毎年10名超のボランティアが参加して、里山（自然）を残すことの重要性やその活動に参加している方々の思いに触れることができている。里山という場所がら、大学生にとってはわかりづらく、集合しづらいため、遅刻するボランティアが毎回数名でしてしまう。

大学生にとっては、日常を離れた中での活動で自然の良さを実感することができている。また、学生自身が考え動く内容もあるため、学生の学びと成長をみることができる。このイベントは、親子の参加が多い。このようなことから、未来の自分の生活のモデルとして捉える学生も多い。こども達の安全を確保する必要もあるため、ボランティアとしての充実感が大きい。この活動の事前に授業で活動者から、これまでの歴史や意義を講義いただいているため、学生たちの理解度も大きい。

活動者側からは、次世代である学生に、この活動や思いを知ってもらい、継承したいと考えているため、大学生が参加することが活動者にとって、大きなモチベーションアップとなっている。

活動の事例3 鶴ヶ島市社会福祉協議会

- 1 ボランティア名 視覚障害者伴走ボランティア
- 2 開催日時 2024年6月～7月
- 3 内容 視覚障害者のマラソンの伴走
- 4 場所 主に鶴ヶ島市内

5 視覚障害者もマラソンを楽しみたい方が多いが、そのマラソンに付き添えるボランティアが少ないのが現状である。そのような中で体力のある学生が視覚障害者の安全を確認しながら、付き添ってくれることで、視覚障害者自身のモチベーションアップだけではなく、日常的に伴走しているボランティアにも出番ができ、張り切って活動を継続している。

視覚障害者等障害当事者は、自分たちの生活の不便さや豊かさを多くの方に知ってもらいたいと考えているため、学生への支援は惜しまず調整をしてくれる。一度に多くの学生の対応が難しいため、今年度は6回もの日程を調整していただき、学生たちと一緒に走ってくれた。

学生にとっては、視覚障害者やその方々にかかわるボランティアの皆さんの生活や思いを確認できると共に、視覚障害者の方を安全に安心して誘導できるガイドヘルプのスキルを学ぶことができる。このスキルは日常的にも活かせるものと考え。何もよりも、目が見えなくなるという人生の困難にあっても、充実し社会貢献も行っている方々との出会いは、学生にとってはとても、これからの人生において大きな意義がある。

活動の事例4 鶴ヶ島市社会福祉協議会

- 1 ボランティア名 高齢者施設ボランティア
- 2 開催日時 2024年6月～7月
- 3 内容 デイサービスのボランティア
- 4 場所 坂戸市内施設 デイサービス moi

5 デイサービスには、要介護状態 特に認知症になっている高齢者がいる。このデイサービスの経営者は30代の若手であり、いわゆる高齢者施設という概念ではなく、できることを自由にできるデイサービスとなっている。学生は、高齢者とコミュニケーションをとり、普段なかなか出会うことが少ない高齢者に対応する。また、このデイサービスのスタッフの理念や行動を見ることにより、現在の高齢者の課題や目指すべき方向性を読み取ることができると感じる。

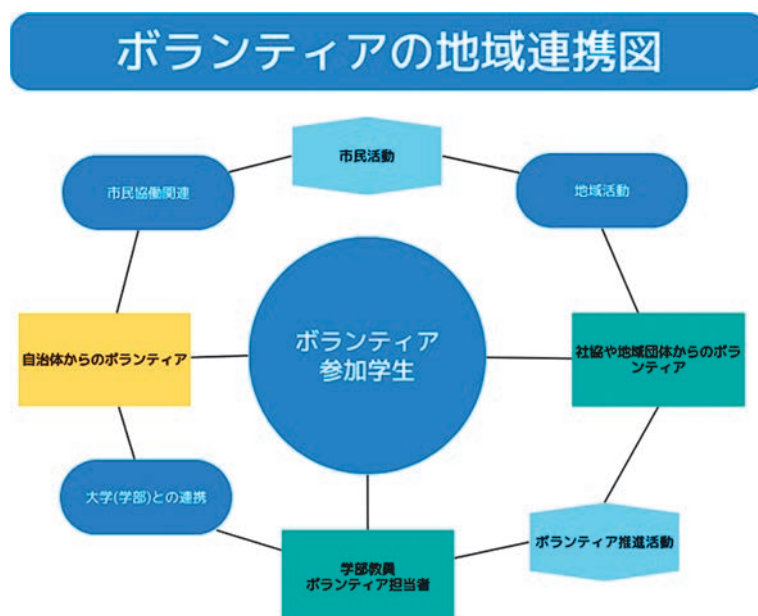
高齢者は、若者と接することでとても元気になる。その意味でも高齢者施設に学生がボランティアに入ることは大きな意味がある。

4.3 最後に

現在のボランティア活動と地域連携は第二段階に入っていると思われる。前述しているが1995年の阪神淡路大震災におけるボランティア元年と言われていた年に地域の課題を発見し問題を解決しようと多くの団体や組織や個人が活動を始めていた。このような団体が1団体で課題に取り組もうとしていた第一段階を経て、現在の地域の課題は複雑化しており、一つの団体や組織や個人だけで解決するのは困難といえる。個人や小規模団体の活動は、ソーシャル・キャピタルが不足してしまい時間の制

約、継続が難しい。だが、地域連携を通じて、役割分担や資源の共有を行うことで、活動を持続的に展開しようとしている第二段階に入っていると思われる。

図4.1 ボランティア活動のイメージ



そして、そのような中、人的リソースとして、大学生がボランティアに参加することで、より地域活性化の一役を担うことが可能となる。今は、変化の時である。何もしなければ来る未来は見えている。だが、ボランティア活動によって、顔の見える関係を築きつつ、地域住民や行政、企業、NPOなどと連携することによって、地域課題の効果的な解決を実際の現場で学ぶことで、言われている未来に変化を加えることはできる。連携や協働によって新しい価値やイノベーションを見つけることが可能になる可能性もある。ボランティア活動と地域連携は、相互に補完し合い、地域社会の課題解決や地域経済に影響を与えている。大学生がボランティア活動に参加することは、地域貢献をするような人材育成の実現につながるとともに、社会全体の改善を意識するような調整力を持った学生が多くなることを期待したい。

参考文献

- 1) 木村佐枝子 (2014)『大学と社会貢献：学生ボランティア活動の教育的意義』創元社
- 2) 安齋徹 (2016)『企業人の社会貢献意識はどう変わったのか：社会的責任の自覚と実践』ミネルヴァ書房

参考論文

- 1) 遅 力裕 (2024)「ボランティア参加における動機づけの内面化：自己決定理論に基づいた考察」同志社大学社会学会 評論・社会科学 (149), 27-40
- 2) 佐藤 陽 (2022)「大学ボランティアセンターにおける地域ボランティア活動の推進」十文字学園女子大学紀要 52, 43-55
- 3) 金谷 信子 (2008)「市民社会とソーシャル・キャピタル」コミュニティ政策学会 コミュニティ政策 6 (0), 124-143
- 4) 渡辺 裕子 (2017)「ボランティア活動の経済的価値のマクロ的分析：『社会生活基本調査』を用いて」駿河台経済論集 27 (1), 25-50
- 5) 松宮 朝, 石井 晴雄, 川原 千香子, 小島 祥美, 中根 多恵, 笹山 実希 (2018)「大学連携におけるボランティア活動推進をめぐる課題－長久手市4大学学生ボランティア調査から」愛知県立大学多文化共生研究所 共生の文化研究 12, 26-47

参考HP

- 1) 日本財団ボランティアセンター (2023)『全国学生1万人アンケート～ボランティアに関する意識調査2023～』(<https://www.volacen.jp/pdf/2023-student-volunteers-survey.pdf>) (2025年1月)
- 2) 内閣府 (2023)『2022年度(令和4年度)市民の社会貢献に関する実態調査－報告書』(https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/R4_shimin_report.pdf) (2025年1月)
- 3) 鶴ヶ島市『地域支え合い協議会とは』(<https://www.city.tsurugashima.lg.jp/page/page000707.html>) (2025年1月)
- 4) 明治大学『ボランティアセンターでできること』(<https://www.meiji.ac.jp/campus/volunteer/6t5h7p00000gfgym.html>) (2025年1月)
- 5) 明治大学『社会実習 ボランティア活動単位認定制度』(<https://www.meiji.ac.jp/seikei/project/volunteer/volunteer.html>) (2025年1月)
- 6) 立教大学『ボランティア活動』(https://www.rikkyo.ac.jp/campuslife/support/extracurricular_activities/volunteer.html) (2025年1月)
- 7) 立教大学 (2023)『ボランティア論』(https://sy.rikkyo.ac.jp/web/preview.php?nendo=2023&kodo_2=FA185) (2025年1月)
- 8) 立教大学 (2024)『ボランティア論』(https://sy.rikkyo.ac.jp/web/preview.php?nendo=2024&kodo_2=IB394) (2025年1月)
- 9) 立教大学『立教サービスマーケティング』(<https://spirit.rikkyo.ac.jp/rsl/SitePages/index.aspx>) (2025年1月)
- 10) 立教大学『立教サービスマーケティング(RSL)とは』(<https://spirit.rikkyo.ac.jp/rsl/about/SitePages/index.aspx>) (2025年1月)
- 11) フェリス学院大学『ボランティアセンター』(<https://www.ferris.ac.jp/life/volunteer-center/courses/>) (2025年1月)
- 12) 厚生労働省 (2010年)『大学における福祉ボランティアによる単位取得①』

(<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000rkqz-img/2r9852000000rkxs.pdf>) (2025年1月)

- 13) 文部科学省 (2024) 『令和6年能登半島地震に伴う学生等のボランティア活動について (通知)』

(https://www.mext.go.jp/content/20240122-ope_dev03-000033400-3.pdf) (2025年1月)

- 14) 厚生労働省 (2023) 『ボランティア活動』

(https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html)

(2025年1月)

Regional Cooperation and Human Resource Development through University Student Volunteers

- Roles of Local Communities and Universities -

YANAGISAWA Tomomi*, MAKINO Ikuko**, KAYAMA Asaka***

Key words : volunteer, community cooperation, social welfare council, credit recognition,
social contribution

Abstract

This paper examines the need for volunteers in the community and the importance of student volunteer participation through volunteer activities targeting university students.

Volunteering is beneficial in contributing to the community. However, this includes significant problems.

First, it cannot be said that the younger generation, including university students, has established an awareness of ongoing volunteer activities and volunteerism.

Rather than forced volunteering, an important issue is to connect the needs of university students with local issues and consider whether initiatives that have educational significance for university students are possible.

Many universities are currently engaged in university partnerships with the community. Therefore, it is desirable for volunteers to operate in any way possible, and further improvements and issues for promoting activities will be extracted.

* Professor, Department of Social and Economic Systems, Faculty of Contemporary Policy Studies
** Tsurugashima City Social Welfare Council
*** Hidaka City Council of Social Welfare